後記

「駒澤國文」第61号をお届けする。今号は、専任教員による研究論文四本、新刊紹介二本を掲載することができた。

コロナ禍によってもたらされた授業形態や学校生活の変化も、昨年度から徐々にもとに戻されてきており、今年度は完全に旧に復した。とは言っても、大学の様々な行事では、オンラインやハイフレックスは一般的な形態となり、授業や会議でも随時利用することとなった。一方でオンラインの活用によって失うものがあることにも気づいてきている。上手に使い分ける工夫が求められている。

そういえば、リモートやオンラインでの授業を強いられたおかげで、何とか使いこなすことができるようになった授業支援システム（C-Learning や YeStudy）であったが、大学ではコロナ禍とは無関係に、以前からの計画に従って、今年度から新しいシステム（WebClass）が導入された。教員・学生共々、大童の年度始めであったが、今なお試行錯誤が続いている。

授業形態だけでなく、学生の気質にも変化が見えるように思うが、学生に学んでほしいこと、身につけてほしいことの根本はそうそう変わるものではない。変転やまない昨今だからこそ、教員は大学教育の意味を真摯に問い続け、教員自身も努力を不断に重ねていく。

十二月十六日に、第66回国文学大会がオンラインで開催された。今回は昨年度赴任した加藤邦彦先生による講演「文学全集のなかの『中原中也全集』」で、御専門の近代詩についてお話をうかがった。近現代文学研究といえば、作品の新しい解釈や読みの転換、新しい理論を取り入れた研究などをまず思い浮かべるが、加藤先生は、『新編中原中也全集』の編集の仕事の経験を踏まえて、詩の本文の異同の問題や本文校訂作業の重要性を、具体例を示しながら分かりやすく、情熱的にお話しくださった。地道で継続性を要する作業であるが、文学研究の基礎となる「本文」を見つめ、着実に研究を押し進める重要なご研究である。研究の醍醐味を味わうことのできた、貴重な一時間であった。

講演は一年生には必修としている。文学研究の裾野の広さ、今まで知ることのなかった研究方法に接し、国文学研究の面白さに気づいた学生もいたと確信している。

国文学会当日の午前中に院生発表会を開くことができた。何年ぶりであろう。大学院修士・博士課程に進学する学生が激減している昨今である。少しでも勉学・研究に意欲を持つ学生や院生には、できる限り応援をしていきたい。

最後になったが、一月一日に起きた能登半島地震で被災された方々に、心よりお見舞申し上げる。直接的・間接的な被害を受けた学生や卒業生もいる。天災には人間の無力・非力が思い知らされる。少しでも早く、もとの生活、新しい生活を始められることを祈るばかりである。

（S）

編集委員　櫻井　陽子
近衛　典子
加藤　邦彦